田丸先生退官

立教時代の田丸さん

藤田富雄

田丸さんに初めてお会いしたのは40年前であった。卒業直後の新職場で全力投球のため、大学院生とは名ばかりの状態で本郷に足を向けることもほとんどなかった私は、久し振りに研究室に出かけたとき脇本助手から、「宗教哲学や思想を専攻する25年入学の田丸徳善君だ。一高出身の秀才だよ。」と紹介された。その後、彼は30年に渡欧、36年に帰国、37年4月から助手に就職された。奇しくも同じとき、私も非常勤講師として初めて東大で講義をもつことになった。私は43年3月に退職したので、4月から非常勤講師に就任した田丸さんは、私の後任という形となった。

田丸さんとの関係はそれだけではない。彼は37年4月から39年9月30日まで助手を勤めて、10月1日から立教大学の専任講師となられたので、田丸さんと私は今度は立教大学の同僚として同じ研究室で生活するようになった。岸本先生が39年1月25日に逝去され、立教大学助教授であった脇本さんが急に4月から東京大学助教授として移籍することになった。その後任には東大哲学科出身の加藤武さんをお迎えした。ところが、海外研究で出張中の沢井正治教授が思いがけなくチューリッヒで急逝されたので、後期からその後任として田丸さんが立教に来られることになった。脇本さんの移籍後わずかに半年後のことである。田丸さんが脇本さんの後任として立教に迎えられたと思っておられる方も多いようなので、事実経過を明らかにしておきたい。田丸さんは48年3月に東大助教授として立大を去られたから、8年半の間、私は彼と一緒に立大の研究室で過したことになる。

立教時代の田丸さんの思い出は尽きない。いわゆる大学紛争のとき、赤司さんが一般教育部長として大奮闘されたので、宗教学科の後輩である田丸さんと鈴木範久さんと私の3人もできる限りの努力をした。周知のように、立大は一度も機動隊を構内に入れないで、あくまでも学生と教職員との対話を通して、問題を解決したのであるから、紛争後の大学改革にも積極的意欲的で、続出する新しい諸委員会のメンバーとして、田丸さんもきめ細かな配慮をしながら誠実に取組まれた。

田丸さんが就任されるまでは、哲倫研究室の雑務は、脇本さんが中心となって何とか処理していた。新任の田丸さんは、眼を見張るような事務処理能力を発揮して、研究室の図書・機器・備品の帳簿の整備、機関研究をはじめとする科研の書類作成などをてきぱきと片付けられた。事務が嫌いで、とかくルーズに流れがちな同僚たちが、積極的に事務を分担するようになったのは、田丸さんの何も言わずに黙々と迅速に事務を処理する姿に自然に感化されたためかもしれない。

今でもお気の毒で申訳なく思うのは、立教在任中に、田丸さんの研究がほとんど進展しなかったことである。その最大の原因は、大畠先生の懇望に応じて、畑違いのテル・ゼロール発掘調査に40年以後ずっと関わり続けられたためである。他の原因は、誰にでもあてはまることではあるが、紛争後の大学改革の仕事に追われて、研究時間が少くなったためである。これはあの筆の早い田丸さんの論文数が立教時代にはきわめて少いことを見てもわかる。折角苦労して集めた多くの図書、とくに儒教関係の本を研究室に残したまま立教を去られたことは、ご本人は勿論、われわれにとっても残念至極であった。

東大移籍の話がおこったとき、研究と健康のためには立大に留る方がよいと判断され、健康を口実に移籍を断るほかあるまいと、わざわざ精密検査を受けたりした田丸さんであった。幸か不幸か、検査の結果は移籍ゴーであった。あのときの田丸さんの複雑な表情を忘れることはできない。余談だが、脇本、田丸と二人の宗教学の大黒柱を立大

から送り出したことになって、「一般教育部の哲倫研究室は東大宗教学教授養成の出先機関か」との厳しい批判が学内から起ったのも事実である。お二人の研究者・教育者としての優秀さと素晴らしいお人柄に対する立教の大きな期待を示す声であったと思う。定年退職まで立大に残っていたのは赤司さんと私である。それでも性徴りもなく月本さんを迎え、鈴木さんとお二人で、東大宗教学の伝統を守っていただいていることを、感謝をこめて付言しておきたい。

最後に、田丸さんの東大教授昇格が決定したときのエピソードを述べて筆をおくことにする。それは58年6月8日のことであった。立教学院ウィリアムス主教基金で来日したシカゴ大学の北川三夫教授に午前中は東大で特別講義、午後は東奔西走の北川さんに休養の時間をという気配りをしたその当日であった。夕方、宗教学の立大関係者だけが、立教通りの銘酒の店三春駒で「北川さんを囲む会」を開いた。北川さんは立大出身の宗教学界の世界的リーダーの一人で、シカゴでお世話になった方が多いことはご存知の通りであるが、その夜のささやかな歓迎会に集ったのは、赤司・脇本・田丸・鈴木・藤田という北川さんの気のおけない昔馴染の連中であった。銘酒を酌みかわして旧交を温めているところに、柳川さんが本郷の教授会から馳せ参じて、田丸さんの教授昇格の朗報をもたらした。歓迎会が期せずして祝賀会に一転したことは言うまでもない。北川さんも「国際宗教学会にとっても嬉しいことだ」と大喜びで、「田丸君のための祝い酒を選ぼう」ということになった。衆議一決で熊本の『美少年』が「タマちゃんに最もふさわしい酒」として選ばれ、吟醸酒で一同乾盃した。「今でもあのときの空瓶を記念に大事にもっています」と、先日の大谷大学での学会のとき、田丸さんは私に話してくれた。二次会は、北川さんの所望で、曽遊の下北沢の飲屋まで遠征した。飲めぬ田丸さんもお伴をした。午前1時をまわって立教の迎賓館まで送って帰る役目はやはり私であった。あの日から6年もたった。懐かしい思い出である。